



実施者

＜教 員＞千葉大学 特任専門員 / 地域コーディネーター 阿部 厚司

＜参加者＞千葉大学 理学部生物学科 3 年 奥山 登啓

＜協働パートナー＞

【行 政】南房総市役所 市民課市民協働グループ

【企業等】ヤマナハウス、合同会社 WOULD（シラハマ校舎）

【個 人】地域おこし協力隊 荒川 悠ほかメンバー、ヤマナハウス南房総三芳シェア里山 代表 永森 昌志、
副代表 沖 浩志、溝口 耕一、合同会社 WOULD（シラハマ校舎） 代表 多田 朋和

1. 背景と目的

全国共通学力テストの継続的な難化にも見て取れるように、近年中等教育の現場はますます高度化し扱う内容も年々増えている。特に生物学の分野においては顕著であり、その時代に合わせて教科書の内容も急速に変化し、膨大な量の知識がテキストに詰め込まれている。教員はすべての範囲を終えることに精一杯で、生徒はそれについていき目の前のテストで高得点を取ることに必死である。このような受験勉強型の学習スタイルが教育の現場に定着するにつれて、「机の上での学習」が習慣化されていき、生徒が実際に自らの手と足を使い、目で見て直接触れたりする機会が失われているように感じる。自然とふれあうことで自らの感性を刺激し、知的好奇心の赴くままに探求するといった生物を学ぶ上で最も魅力的でかつ根本的とも言える要素が、しだいに失われつつあるのではないだろうか。

そこで私は南房総の豊かな自然に着目した。大都市に隣接しながらもたくさんの動植物が生息し、身近に自然を感じることでできない都会の学生にとってはもちろん、地域の学生にとっても最高のフィールドが用意されていると感じた。この環境を生かした自然体験型学習プログラムは、学校教育でインプットした膨大な知識を実際にアウトプットできる楽しさを感じると共に、その後生徒自ら更なる学びへと発展させていくきっかけになると考えた。最終的には南房総でのプログラムを例にこれをパッケージ化し、全国の地域でこうした取り組みが広がることを目指す。

2. 実施内容

月例イベント（7/17、10/2、10/16、11/6、11/20、12/4、1/8） 計 7 回

ヤマナアカデミー（12/11～12） 計 1 回

シラハマ校舎（12/5～7、1/9～1/11） 計 2 回

(1) ヤマナハウスでの活動

ヤマナハウスではヤマナメンバーの方々に同行し、月例イベントやヤマナアカデミーなどの活動に参加した。竹を刈る作業や側溝の土を掘り返す作業など、普段の大学生活では体験できないような貴重な経験を通して、沢山のスキルを身につけることができた。ヤマナハウスに集まる方々は年齢も職業もそこに至る背景も皆それぞれ異なっていたが、一緒に汗を流す中で次第に打ち解けていき、自然と心を通わせることができた。

また、生物調査と題して裏山や小川に入り、生息する生き物を調べて種を同定する活動も行った。食の可能性を広げるといふ狙いで身近な昆虫を食べて味の感想をまとめたり、里山の保全という狙いで小川に生息する生き物を調べたりする活動も行った。自分ほもとと鳥に興味があったので、沖浩志さんの指導のもと鳥の鳴き声からその種を同定する練習をし、今ではいくつかの種を鳴き声だけで識別することができるようになった。すっかり鳥に魅了された私は時折り大学キャンパス内で鳴いている鳥の声を録音しては、沖さんに動画を送り確認をとっている。ヤマナハウスでの繋がりが、いつの間にかその垣根を越えた繋がりへと発展していたことに気づかされた。

(2) シラハマ校舎での活動

シラハマ校舎では、自然体験型プログラムの画策に向けてより実践的な活動を行った。多田朋和さんのご厚意により現地で滞在させて頂きながら、宿泊者の方々を対象とした自然体験型の学習プログラムについて考えた。調べ学習と実地調査、そして多田さんとのミーティングを繰り返す中で、アイデアが徐々に増えてきた。

このプログラムの目的として、自然との触れあいを通して生き物の美しさや魅力に気づき、それらを保全していくことの重要性や意義について考えることが挙げられる。そして見据える目標としては、「滞在者の方自身で完結できる内容」、「子供も大人も楽



1 交流の様子 2 刈払機の使用 3 水生生物調査 4 シラハマ校舎 5 南房総の雄大な自然

域学協働の工夫！

★ヤマナハウス、シラハマ校舎という異なる 2 拠点を活用できたことにより、多様な視点が広がったり、逆にそれぞれを融合させて新たな物事を生み出したりすることができた。

★駅から活動拠点までの送迎をヤマナメンバーの方々に依頼していたが、移動の効率が上がり作業時間が長く確保できただけでなく、車内でのコミュニケーションを通して関係をより深めることができた。

★ヤマナハウスでの活動後そのままの足でシラハマ校舎へと移動することで時間と移動費のコストを削減することができた。

しめるファミリー向けのイベント」、「その季節に応じた様々な企画」が挙げられる。例えば 6 月～7 月に開講予定の鳥の巣箱作り体験では、説明書の案内に基づき営巢用の巣箱を滞在者の方が手作りして、シジュウカラやヤマガラなどの野鳥が営巢した後、その様子を巣箱に設置したライブカメラで捉えシラハマ校舎でリアルタイムの映像を配信してシェアすることができると考えた。この他にも、シイタケの植菌体験や昆虫標本の作製など様々なイベントを計画しており、実現に向けて調査や試行を繰り返している。

3. 成果と課題

(1) 地域貢献面

地域の方々との交流を通して、自分が専門とする生物学の魅力をわかりやすく還元すると同時に、自分自身も普段は養うことのできない価値観やものの考え方を知ることができた。また、学生独自の視点から活動に踏み込むことで、地域の団体に新しい風を吹かせることができたと感じる。

一方で、生物という自分たちのフィールドを生かした活動が自己満足な結果に終わっているのではないかと反省もあった。生物の魅力を単に押しつけるのではなく、その面白さをどう感じてもらえるのか、分かりやすく還元していく必要があるように感じた。

(2) 教育・研究面

冒頭でも述べたように、現在の中高等教育は学習の場がますます机の上に固定化され、教科書を天下り式に理解する学習スタイルが定着しつつあるように感じる。生徒の知的好奇心に直接訴えかけるようなフィールドワークは、柔軟な発想や主体的な学びを実

*表彰・マスコミ掲載など

・「シラハマ校舎 COC + 事業」掲載 <https://www.awashirahama.com/nagao/coc/index.html>

・「南房総三芳のシェア里山」掲載 <https://yamanahouse.site/>

現する上で非常に重要な役割を担う。実際、私自身も幼少期の頃に父親が開講していた自然体験プログラムに参加しており、学校での学びと野外での体験が直接結びついた時の感動に勉強することの面白さを見出し、現在大学で生物を学ぶに至っている。同じ分野を研究する友人に話を聞いてみても似たような体験をしていたケースは多く、学校に代わってこうした自然体験型の学習プログラムを提供することには、教育面で非常に大きな意味があるように感じた。

4. 今後の展開

これまでの活動を通して、地域の方々との交流を深めながら様々な知識やスキルを身につけることができた。今後も引き続き積極的に活動に参加していくと共に、最終的な目標である自然体験型学習プログラムのパッケージ化に向けて、より具体的でかつ計画的な取り組みに着手していきたい。

今年度はゲストとして参加していたヤマナアカデミーについても、来年度にはスタッフ側として参加し、一つのプログラムを企画から実施に至るまで担当してみたいと考える。また、地元の小学生向けの課外学習として、ヤマナハウス、シラハマ校舎、大房岬自然公園などの南房総市の地域資源を生かして一つのプログラムを立ち上げてみたいと考えている。